講演

唐代の贈答詩と書簡―古代日本の歌序・詩序を視野に入れて―

永田知之

（京都大学人文科学研究所准教授）

中国では古来、特定の人物に贈る詩が作られ、それらは膨大な数に上る。ただ詩歌の贈答について、その実態は決して詳らかではない。伝達という点に注目すれば、贈答詩は対象に作品が届く様態が直接か間接かの二種に分かれる。当然だが、書簡の伴う例は間接的に伝達される方を主としよう。詩歌が文学の主流に位置し始めた魏晋以降、書簡を附して詩を送達した事跡は、文献にしばしば見られる。ところが唐代の前半（八世紀の中頃以前）まで書簡を伴った詩の実物が伝わる例は極めて乏しい。もとより現存する資料が少ない時代のことであり、また文章は贈答詩の添え物と見做され書簡が残らなかっただけではないかという考え方も可能であろう。しかし書簡の散佚のみが、このような現象の理由ではあるまい。

それと言うのは、第一に唐代前半まででも、書簡ならぬ序であれば文章を附した形を残す贈答詩がかなり伝わるからである。そして第二に文献がなお少ない古代の日本では、受け手に宛てた文章を伴う和歌や漢詩の例を、中国より容易に見出せる。『万葉集』や『懐風藻』に収められる、その種の文章は「序」と題しながら個人を対象としており、書簡と呼んで差し支えない。思うに、中国では詩は広範な読者を想定して公にすべきという通念が早くから普及したのではないか。そうして書簡を省いた贈答詩が唐以前の文献に定着した一方、日本では手紙が詩歌と併せて詞華集に収められたと思しい。空海の作品などを最後に、書簡と見紛う詩序は日本でも下火となるが、これは中国での通念が日本でも広まったと意味しよう。

唐代の後半に、書簡を伴う贈答詩は従来よりもやや数を増す。資料の増加が主因だが、詩の遣り取りをめぐる変化も、それと関わろう。この時期、贈答という詩の機能が拡大したと想像されるのである。伝世の資料並びに敦煌文献を利用しながら、その様子についても考えたい。